

虹

春樹ファンが作る宿

⑮ コロナ禍の砂嵐の中で



荒木さんが集めた村上さんの小説が並ぶ「春樹部屋」

雑誌『ブルーアス』は10月、2号連続で作家の村上春樹さんの特集した。『ブルーアス』は毎回ファッションや映画などジャンルを問わず、ひねりを効かせた特集を組む。同じ作家を2号連続で取り上げるのは異例だ。村上さんの熱心なファンは「ハルキスト」と呼ばれるが、本人たちは作家の要請に応じ「村上主義者」を名乗るらしい。雑誌は当然、村上主義者の間で話題になった。

富山駅北口から徒歩5分の距離にあるゲストハウス「いるかホステル」を運営する荒木まどかさん(32)も村上主義者だ。「情報量がすごい特集でした。ファンとしては全著作を網羅した年表が特にありがたかった」と言う。荒木さんのゲストハウスには、村上さんに関係する本だけで500冊近く並ぶ棚がある。年表はその整理にも役立つ。

ノーベル賞受賞者の発表時期になると、荒木さんの心が少しざわつく。メディアが村上さんの受賞の可能性をめぐって騒ぐのは秋の風物詩だが、「もらってももらわなくても、どっちでもいい。すごい作家なのはみんな知っているんだから」と熱を込める。

ゲストハウスは相部屋が基本の簡易な宿。他人と空間を共有するからこそ生まれる出会いと、割安な宿泊料が魅力だ。「いるかホステル」は村上作品に限らず、本や漫画を豊富に備えているのも楽しい。

富山駅から近いという立地もあって、山小屋のスタッフが下山した際に利用することが多い。湯沢 孝介さん(29)＝埼玉＝もしばしば泊まる。「オーナーの明るい人柄に、ほっとするんですよ。最近は登山も始めたみたいで話も合います」と話す。荒木さんは昨年登山を始めたばかりの初心者。コロナ禍で山に登る時間ができた。

◇

富山市の実家は本であふれていた。父と母、兄、姉、妹、そして荒木さんそれぞれのための本棚があった。『ハリー・ポッター』シリーズを卒業し、手にしたのが村上さんの小説だった。村上さんならではの独特の比喩に惹かれた。お気に入り『海辺のカフカ』の一節だ。

＜ある場合には運命ってというのは、絶えまなく進行方向を変える局地的な砂嵐に似ている。君はそれを避けようと足どりを変える。そうすると、嵐も君にあわせるように足どりを変える。(中略)そいつはつまり、君自身のことなんだ。君の中にあるなにか

なんだ＞

その砂嵐をくぐり抜けると、新しい自分になるという。何度も読み返した。困難にぶつかった時に支えてくれる言葉になった。「言葉って、言えば言うほど気持ちとずれる。でも、春樹はピタリと表現してくれる」

研究者になりたくて、理系の大学に進んだ。「リケジョ」という言葉がもてはやされる少し前だった。大学では染色を専攻した。人混みが嫌いで、就職は田舎でしようとして決めていた。漠然と東北で働きたかった。しかし、就職活動の矢先に東日本大震災が起きた。志望していた東北の企業は採用活動を中止した。最終的に縁があったのは富山県内に研究拠点を置く企業だった。

初めての社会人生活は海外赴任する経験を得られ、十分充実していた。しかし、研究者として花を咲かせる自信を持てなかつ



「なじみの秋」 西 淳子

た。安定した大企業で頑張っても「そこそこの存在」で終わる気がした。

気晴らしは旅行だった。台湾旅行で初めてゲストハウスを体験した。見知らぬ他人と同じ部屋で寝ることに抵抗があったが、思いのほか面白かった。宿で意気投合した人たちと計画も立てずに街を巡る。気になったビルに入ってみたり、スーパーをのぞいたりする。予想外の出来事が起こる。旅行とは観光地の写真を撮ることだと思っていたが、偶然生まれた交流が意識を変えてくれた。見知らぬ街の片隅の光景が、既成の観光コースにはない特別なものになり得る。快適なホテルに泊まっていたら知らなかったかもしれない。「出会いを提供する側になりたい」という思いに駆られるようになった。入社5年で退社した。

当時は政府がインバウンドの観光促進に力を入れていた。政策に合わせて、手頃な料金で利用でき、外国人に人気のゲストハウスの設立が相次いだ。ノウハウも広く共有されていた。ホテルや旅館のような整った設備も、調理スタッフもいない。清潔なベッドさえ提供できればいい。

「いるかホステル」という名前は『羊をめぐる冒険』や『ダンス・ダンス・ダンス』などの村上作品に登場する「いるかホテル」をもじった。さらにファンならではのサービスを用意した。村上さんの小説は世界各国で翻訳されている。翻訳本を寄贈すれば、無料で1泊できることにした。

2018年のオープン以来、経営は順調だった。繁忙期は洗濯と清掃に明け暮れた。休みもない。ただ、やりがいがあった。一つ一つの仕事に意味があると感じられた。ほ

とんど参考にされない資料作りも、形式張った会議もない。フランス語や中国語の村上作品も集まった。

◇

にぎわいに変化が訪れたのは、2020年の3月頃。東京五輪の開催が危ぶまれ、マスク不足が続いた。海外からの予約はキャンセルされた。東京などで初めて緊急事態宣言が出された4月から2カ月間、休業を余儀なくされた。本来なら残雪の山を求める旅行者が訪れるはずだった。1年で最も売り上げがある書き入れ時だった。ストレスからか、荒木さんの全身にじんましんが出た。

客が来ない分、時間はあった。「閉じこもっていてもダメ」と登山を始めた。ゲストハウスにはしばしば山好きが泊まっており、関心はあった。実際に登ってみると、

宿にテントを乾かすスペースや、登山靴の代わりに履くサンダルがあれば便利だと分かった。自分の目で見た自然の魅力を自分の言葉で伝えられるようになった。

◇

その年の10月、村上さんの特集したラジオ番組に「自分のゲストハウスに春樹さんの作品を集めた図書室を作りたい」と投稿した。開業以来、いつか実現したいと思っていた夢だった。メッセージは読み上げられ、村上さん直筆で宛名付きのサイン本が番組からプレゼントされた。

それだけでも望外の喜びなのに、ラジオを聞いた青森の男性から「家を処分するから」と村上さん関連の書籍が250冊近く贈られた。ハードカバーの初版本や、手に入れにくい雑誌もあった。別のリスナーからは、ギリシア語やドイツ語に翻訳された村上さんの本が届いた。「春樹がいたから生まれた縁。たくさんの方が来てくれる宿にしないと」と気持ちを新たにした。

客室を一つつぶし、仲間と「春樹部屋」を作った。村上さんの本だけを並べる夢の図書室だ。美術家の若木くるみさん(36)＝京都＝も協力した。若木さんはオープン当初からの常連客。いつしか意気投合して友人になった。「荒木さんは『好き』の情熱がすごい。コロナでも『ただでは起きないぞ』という根性も感じた。関西人じゃないけど、『負けへんで』っていう気持ち」。2人はアイデアを出し合い、テーブルやティッシュケースを村上作品の細部を意識したデザインに仕上げた。ファンが見たらニヤリとしてしまうしつらえになった。

コロナの感染状況は落ち着いたが、経営は厳しいまま。荒木さんは自転車で食品配達する副業を始めた。自家用車は売却した。

仕事に限らず、人生は起伏に富む。開業後すぐに結婚した夫とは、最近別れた。「順調なだけだと、面白くないでしょう?」。砂嵐の中で人生が激しく動いている。

本を贈ってくれた人たちとは文通を続けている。コロナが収束したら遊びに来てもらおう約束がある。

かつて荒木まどかさんは村上春樹さんのファンであることを隠していました。メジャーな作家であるからこそ、あれこれ言う人がいるからです。確かに村上さんを軽視する評論家もいました。今の荒木さんは村上主義者であることを隠しません。好きなものを好きと言えることはすてきなことだと思います。



「虹」第7巻 発売中

最新刊の第7巻「虹 補助輪をはずした日の風」は、北日本新聞連載の121～140回目までの20話分を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見・ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は12月1日(水)です。

紙面提供／人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社営業局